

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

* オリンピックで聞いた曲あれこれ *

深草 真由子

ミラノとコルティナー・ダンペッツォを主な会場として行われた 2026 年の冬季オリンピックが閉幕した。イタリアは開催国ということもあって大いに盛り上がり、イタリア人選手たちの活躍にも目を見張るものがあった。アルペンスキーもスピードスケートも強かった。ベテラン勢や女性の活躍がとくに目立っていたように思う。ドイツ語系の名前をもつ選手が多いのも興味深かった。オーストリアと国境を接するアルト・アディジェ出身の人たちなのだろう。外国人アスリートの中かでもっとも話題になったのは、フィギュアスケート男子のイリア・マリニン選手だろうか。団体戦では 4 回転ジャンプやバックフリップを成功させ、世界中をあっという間に驚かせたが、金メダルが期待された個人戦では実力を発揮できず、残念な結果に終わった。しかしエキシビジョンのパフォーマンスは見る者の心に訴えかけるものがあり、すばらしかった。

Nessun dorma (G. Puccini, 1926)

同じくフィギュア男子で銀メダルと銅メダルに輝いた日本人選手も注目をあつめた。とくに鍵山選手のほうは、イタリアのフィギュア界のスターだったカロリーナ・コストナーをコーチにつけていたから、なおのことだったかもしれない。その鍵山選手がフリーの演技で使った楽曲は *Nussun dorma* 「誰も寝てはならぬ」だ。

オペラ『トウーランドット』の再終幕でトウーランドット姫に求婚する王子が歌うアリアである。世

界最高峰のテノール歌手ルチャーノ・パバロッチの十八番だった。20 年前のトリノ・オリンピックでは、開会式でパバロッチがこの曲を歌い、荒川静香選手がこの曲で金メダルに輝いた。

『トウーランドット』はジャコモ・プッチーニの遺作である。ミラノのスカラ座で初演が行われたのは 1926 年のことだった。つまり今年には 100 年目の記念すべき年なのである。



【ジャコモ・プッチーニ】

出典元: <https://x.gd/zx7he>

Nessun dorma は今回のオリンピックの開会式でも、アンドレア・ボチェッリというテノール歌手によって歌われた。スタジアムの照明が落とされ、観客席でスマホのライトがキラキラと星のように輝かなかでの歌唱は、ほんとうのオペラの一場面のように美しかった。そして歌がひと段落し、il suo nome nessun saprà〈彼の名は誰にも分からない〉という静かな女声コーラスが始まるところで、舞台の奥から聖火があらわれた。そんな粋な演出といい、vincerò, vincerò〈わたしは勝つ、わたしは勝つ〉という力強く自信に満ちたラストの盛り上がりといい、オリンピックという大イベントの幕開けにふさわしく、なかなか感動的だった。

Con te partirò (A. Bocelli, 1995)

ボチェッリはオペラの楽曲だけではなく、オリジナルの曲を声楽風に歌うこともある。代表曲は *Con te partirò* 「君と旅立とう」。そしてそれがサラ・ブライマンというイギリスの歌手によって英語でカバーされたのが *Time to say goodbye*。

この楽曲を、今回のオリンピックでは、坂本花織選手が使用していた。プログラムの後半では、ボチェッリのイタリア語での歌唱も入っていたように思う。サビの部分しか知らなかった筆者はこれを機にはじめて曲全体を聞いてみたのだが、心地よいテンポに伸びやかな歌声で、どこか訪れたことのない国の上空をすーっと飛んでいるような気分にさせてくれた。坂本選手の演技も曲のそんな雰囲気にならわしく、自由で生き生きとしたものだった。

Caruso (L. Dalla, 1986)

フィギュアスケートのペアも見ごたえがあった。とくにショートプログラムで出遅れた日本人ペアがみせた、フリーでのパーフェクトな演技は鳥肌ものだった。

イタリアのサーラ・コンティ選手とニコロ・マチー選手のペアは、ジャンプでいくつかミスがあったものの、6 位に入賞した。実はコンティ選手には怪我があり、ほんの 1 か月前はまだ松葉杖をつけていたような状態だったという。それを考えると、よくここまで頑張ったものだと感心する。



【エンリーコ・カルーゾ】

出典元: <https://x.gd/RzCOE>

このペアは *Caruso* でフリーの演技に臨んだ。この楽曲のタイトルは、エンリーコ・カルーゾという、1900 年前後にヨーロッパやアメリカで活躍したオペラ歌手の名前からきている。カルーゾは病気を患い、ニューヨークでの公演を中止して緊急手術を受けた。そしてイタリアに帰国し、しばらくソレントのホテルで療養したのだが、48 歳の若さでこの世を去った。それから 60 年あまりが経ったあと、そのホテルの部屋を訪れたルーチョ・ダッラがこの曲をつくった。ダッラはポーニャの人なのだが、歌詞にもメロディにも、どこかカンツォーネ・ナポレターナを思わせるところがある。

Caruso の冒頭は、ソレント湾の見渡せるバルコニーで、カルーゾが若い女を抱きしめ、愛の歌を歌うシーンが描かれている。その女の目から涙が一粒こぼれおちのを見るだけで、おぼれ死んでしまいそうだと思うほど、カルーゾは心を奪われている。まじかに迫りくる永遠の別れ——死——さえも甘美に感じさせる、情熱的で切ない愛を歌った *Caruso* はイタリア音楽史に残る傑作であろう。

Diamanti (Giorgia, 2024)

アイスダンスのシャルレーヌ・ギニヤール選手とマルコ・ファブリー選手のカップルは、今回がなんと4回目のオリンピックだったそう。結果は4位で、メダルには一歩届かなかったが、*Diamanti* という曲が用いられたフリーの演技は印象に残るものだった。

Diamanti は、フェルザン・オズペテク監督による同名の映画のサウンドトラックである。1974年のローマを舞台にするこの映画では、舞台衣装を手がけるアトリエを経営する姉妹と、その女性従業員たちの物語が描かれている。それぞれがそれぞれの悲しみや困難を抱えつつも、なんとか人生を前にすすめていくようすが心をつつ映画で、最近見たものの中でもっとも良かった。

歌い出しはくきと戻ってくる、私の人生は戻ってくる。そしてそれが戻ってきたとき、私たちは強い光をはなつ(ダイヤモンド)になるだろう、と歌う。

この曲を歌うジョルジヤはイタリアを代表する歌姫である。声を揺らすような独特の歌い方が特徴で、聴けば聴くほど好きになる。*Di sole e d'azzurro* や *Come saprei* が代表曲で、昨年は *La cura per me* が大ヒットした。

Inno di Mameli (Mameli-Novaro, 1847)

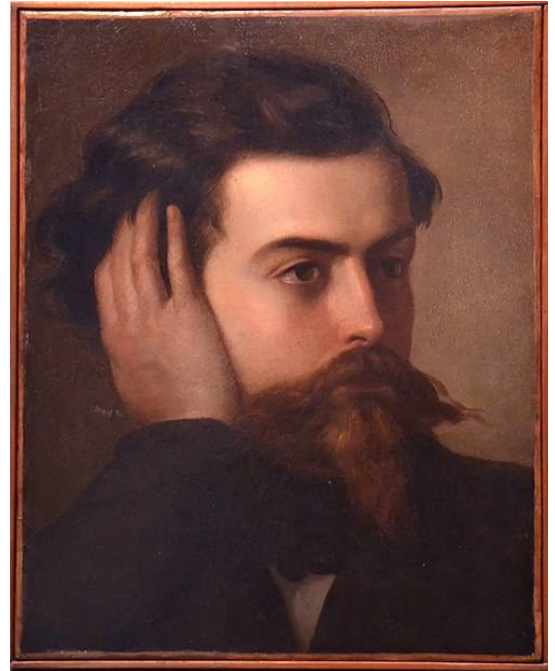
フィギュアから離れ、開会式に戻ろう。開会式といえば国歌である。

イタリアの国歌『マメーリの賛歌』は、ゴツフレード・マメーリが書いた詩に、ミケーレ・ノヴァーロが音楽をつけたもので、リソルジメントの時代によく歌われた。外国の勢力下で分裂状態にあるイタリアを統一するため、「さあ、いま立ち上がる時がきた」と *Fratelli d'Italia* (イタリアの兄弟たち) を鼓舞する曲である。これが国歌とされたのは、第二次世界大戦後、イタリアが共和国になってからである。

実は最近、この国歌にちょっとした変更が加えられた。これまでは *Siam pronti alla morte, l'Italia chiamò. Sì!* (命をかけるぞ、イタリアに召されたんだから。そうだ!) と、*Sì!* で締めくくられるのが慣わしであったが、今後は、少なくとも公式

な場においては、「*Sì!* はなし」ということに決まったのだ。

オリンピックの開会式で国歌を歌う重役を担ったのは、アメリカでグラミー賞を受賞したこともある、ラウラ・パウジーニという歌手だった。シンプルに、勇ましく歌われることが多いイタリア国歌であるが、今回は *Sì!* がなくなったこと以外にも、メロディラインや伴奏に手が加えられており、初めて聞く曲のような新鮮さがあった(アレンジし過ぎだという意見もあったが)。パウジーニの歌声はスタジアム全体を荘厳な雰囲気包みこみ、まるで大聖堂の中にでもいるかのようだった。



【ゴツフレード・マメーリ】

出典元: <https://x.gd/qkGZL>

このように、オリンピックではいろんな楽曲を耳にすることができた。アスリートたちの頑張る姿と重なりあうからこそ、音楽もますます心に触れる。パラリンピックも楽しみだ。

(元当館スタッフ)

リガブーエとの思い出

杉 栄子

前回の記事では、ガイドの仕事について色々な形があることと、私は少人数のパッケージツアーもしくは個人旅行の観光客を案内することが多いという話をさせて頂いた。案内した観光客の数が昨年 1000 名に到達した(私は団体ツアーを担当していないので、客数としては少ない方だと思う)わけであるが、彼らの年齢、職業、社会的立場は本当に様々だった。その中で、個人的にとってもとても嬉しかった出会いがある。なんと、イタリアの大スター、ロックミュージシャンのルチアーノ・リガブーエと家族を案内したのだ！今回はその思い出を書いておこうと思うので、ミーハーっぽい浮かれた話になることを許してほしい。

私がリガブーエを知ったのは 1995 年、ポロニーヤに留学していた時だ。イタリア語のリスニング力を高める目的でラジオやイタリア語の歌をよく聞いていた。最初はサンレモ音楽祭やフェスティバルバールという音楽イベントのオムニバス CD を買って、その時に流行っていた歌を聞き、ジョルジャやラウラ・パウジーニ、ズッケロなどと一緒にリガブーエを知った。リスニングの練習としては女性歌手の方が聞き取りやすいし、特にリガブーエは美しい声の持ち主とは言い難いんだけど、逆にその特徴ある声と歌のメロディが気に入っていた。熱狂的なファンとまではいかないが、日本に帰ってからも時々思い出しては聴き続けていた。

さて、旅行代理店からガイドの仕事を依頼される時点でこちらに知らされる情報は、日程、行き先、客数、交通手段である。例えば、4 月 1 日、京都市内観光、4 名、公共交通機関利用とか、10 月 15 日、大阪市内観光、7 名、専用車利用といった概要を教えてもらい、その仕事を引き受けられるかどうかの返事をする。観光客の氏名などの個人情報、引き受けた仕事日の

2 週間~3 日前くらいに伝えられるので、依頼される時点では誰を案内するのかわからない。なので、案内する観光客がリガブーエだと知った時はすぐには信じられず、あのリガブーエ？本当に？会えるの？と嬉しくて落ち着きを失いかけた。そんな私の様子を不安に思われたのか、代理店からは「あなたはプロのガイドとして仕事で彼らを案内するのだから、サインも写真もおねだりしないように」としっかり釘をさされてしまった。



【リガブーエのライブ】

プロとして他の観光客に対するのと同じように、リガブーエ一家にも楽しい思い出を作ってもらおうと気持ちを切り替え、2018 年春の 2 日間、京都を案内させて頂いた。行き先は二条城や金閣寺、龍安寺に嵐山、さらに伏見稲荷に清水寺といった定番コース。リガブーエは積極的に世界展開をしておらず日本ではあまり知られていないが、イタリアでは超がつく人気歌手なので、訪れた先々で居合わせたイタリア人観光客に見つかっては写真をお願いされていた。奥さんとお嬢さんと一緒に 3 名で来られたが、2 日

目の朝の待ち合わせでは、準備に時間がかかる女性たちを置いてリガブーエだけが先にやってきて行き先を話し合ったり、リガブーエは観光に時間を使いたいのだが、ショッピングも楽しみたい女性たちに譲歩したりと、他の家族と変わらないなあという印象を受けた。

観光を終えてホテルから京都駅へ向かうタクシー車内で、私は思い切って「今度は大阪にライブをしに来てほしい」とお願いしてみた。実はその3年前の2015年に、リガブーエは初来日して東京でライブを開催したのだが、私は用事で行くことが出来ず残念に思っていたのだ(初来日公演に関する裏話は、コレンテ293号の二宮大輔氏の記事をご覧ください)。彼はSiともNoともはっきりとは答えなかったが、実現は難しいという口ぶりだった。そうだよな、ほとんどファンもない日本でライブをわざわざやろうとはならないだろうな。私は残念そうな顔をしていたのかもしれない。そこで奥さんが「Mai dire mai.」と言ってにっこり笑ってくれた。

Mai dire mai.とは直訳すると「絶対にない」とは決して言うな、つまり人生は何が起こるかわからない、今は不可能と思えることが未来において現実になるかもしれないという意味である。だから気をつけるようにしなさいと慎重さを促す意味合いで使うこともあれば、諦めないで、可能性を閉ざさないでと励ます意味合いで使うこともある。今回は後者の意味合いで、希望を捨てないでと私を励ましてくれたのだろう。

京都駅のホームでは、富士山は何時間後にどちら側に見えるのかなどとおしゃべりをしながら新幹線を待った。すると奥さんが一緒に写真を撮ろうと提案してくれ、彼女のスマートフォンでリガブーエの家族全員と記念撮影をした。それまで私は旅行代理店の言いつけを守って写真もサインもおねだりしなかったのだが、この時ばかりはその写真を頂けませんかとお願いせずにはいられなかった。だってまたこんな機会があるとは到底思えなかったから。奥さんは快く応じてくれ、なんと私と電話番号を交換し、写真を送ってくれた。その後無事に出発した彼らは、新幹線車内から富士山が見えたとメッセージもくれた。イタリアでは知らない人はいない

ほどの超有名人だが、いい意味で“普通”で、とても自然体で温かい人たちだった。これからもガイドの仕事頑張ろうと思わせてくれる素敵な思い出となった。



【リガブーエとの記念撮影】

それから7年経った2025年、なんとあの時のMai dire mai.が現実になった。リガブーエが大阪に来てライブを行ったのだ！順を追って話そう。昨年、大阪関西万博が開催され、なかでもイタリアパビリオンは入ることすら困難なほど大盛況だったことは記憶に新しい。万博の敷地内には野外コンサート会場が設けられていて、各国を代表するアーティストたちが毎晩のように何かしらのイベントを開催していた。そこにリガブーエが来て10月9日にライブを行うと私が知ったのは1週間前の10月2日だった。すでに万博の入場券は販売を終了しており、友人から譲ってもらったチケットで予約しようと思数日頑張ってみたものの、残念ながら予約はとれなかった。

しょうがない、ライブに行くのは諦めよう。でもせっかく大阪まで来てくれるリガブーエにメッセージを送ろうと思った。幸い、奥さんの連絡先は保存していたので、京都では楽しかったこと、今回のライブは行けませんが大成功を祈って

いることを書いて送った。先方の連絡先が変わっているかもしれないし、返事は来ないかもしれないが、それでもいいと思っていたら、翌日に返事が来た。しかも、入場出来るように取り計らってみるというのだ。そこからは何がどうなったのか、メッセージで指定されたホテルで入場パスを受け取り、関係者入り口から万博に入場し、また指定されたポイントへ行くイベントスタッフが迎えに来てくれ、あれよあれよという間になんと私はリガブーエの楽屋に招かれていた。緊張しつつ今回のお礼を伝え、本当に Mai dire mai. だねと思い出話をし、写真撮影をし、ちゃっかり CD にサインを頂いた。



【リガブーエのサイン入り CD】

矛盾しているのだが、一旦は諦めたライブに行けるだけで十分満足していたのに、ひょっとしたら直接会えるかもしれないと思って CD を持参していた。その一方で、直接は会えないかもしれないと思って、入場パスを受け取ったホテルに奥さん宛にお土産と手紙を託してきた。後になって気付いたのだが、そのホテルは万博スタッフが宿泊していたホテルで、リガブーエ一家がそこに宿泊しているはずはないのだ。やってしまったと思いつつ、どうしようもなかった。

さてライブは非常に盛り上がり最高に楽しかった。リガブーエはステージを端から端まで何度も往復し、観客全員にパフォーマンスを届けようとしていた。終了後、近くにいた奥さんに、忘れられない思い出になったと再びお礼を述べて、興奮したまま帰路についた。

ライブから2週間後、実は再び奥さんからメッセージが届いた。家に着いて、お土産のお菓子を食べているところだよと。スタッフの誰かがちゃんと届けてくれたのだろう。そのスタッフに感謝すると共に、大勢(本当に大勢)いるファンのひとりでしかない私に対して細やかに対応される奥さんの振る舞いに触れ、なんて素敵な女性なのだろうと、私はすっかり彼女のファンになってしまった。また会える機会があるかどうかはわからないが、Mai dire mai. である。

イタリア語の全国通訳案内士は、需要に対して供給が少ない。だから経験が浅くても、ありがたいことに仕事があるし、訪日旅行にやってくるイタリアの有名人に会えるかもしれないという特典がある。知り合いのイタリア語ガイドはセリエ A のサッカー選手を案内したことがあるし、私は嵐山でガイド中に、ジョルジョ・アルマーニを見かけたことがある。基本的には一期一会で、相手が有名人であろうとなかろうと、日本で楽しい思い出を作ってもらうためにこれからも頑張ろうという気持ちだ。

この記事を書いている3月中旬現在、中東地域が戦争状態にある影響で、ヨーロッパからの航空便には変更や欠航が出ている。春の繁忙期のツアーがいくつかキャンセルになり、夏の予約も平年より動きが鈍いなという印象だ。万博のような国際的なイベントも、海外旅行のような娯楽も、どちらも平和であってこそ楽しめるものだと実感する。世界中のあらゆる紛争が1日も早く終結することを願ってやまない。

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>